

令和4年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

中間・最終)

呉中央中学校区 校番 13呉中央中学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(1年間) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
***	<p>「主体的、対話的で深い学び」の実現 (教務・学年)</p> <p>基礎学力の定着 (学年)</p> <p>家庭学習の習慣化 (教務・学年)</p>	<p>「主体的、対話的で深い学び」の実現 (教務・学年)</p> <p>基礎学力の定着 (学年)</p> <p>家庭学習の習慣化 (教務・学年)</p>	<p>「授業の中で『思考し表現している』』と回答した生徒の割合は全体で88%で、目標値を2ポイント下回った。コロナの影響で、思考過程の工夫を意識した授業づくりが十分にできていないことが要因の1つであると考えられる。</p> <p>定期試験(国・数・英)における通過率30%未満の生徒の割合は平均8%であり、目標値の9%より低い値であった。補充学習や繰り返しの単元テスト等の成果が表れていると考えられる。ただ、教科によっては9%を上回っているものもあり、要因の分析が必要である。</p> <p>全体の家庭学習目標時間の達成率は68%で、目標値を3ポイント上回った。学年間の差もほとんどなく、どの学年も家庭学習の習慣が定着してきている。</p>	<p>タブレット等を活用して、思考過程の工夫を意識した授業を行うなど、コロナ禍だからできないではなく、どのような工夫ができるかを各教科担当者が考え、実践していく。</p> <p>試験前の補充学習や質問教室を継続していく。また、試験の難易度により、30点未満の生徒数が大きく左右されるので、定期テストの出題内容の見直しも必要である。</p> <p>今後も、授業と関わりのある課題を設定し、「呉中央中学校スタンダード」を活用して、家庭学習の定着を図っていく。</p>
**	<p>「心の居場所」がある学校づくり (学年・生徒指導)</p> <p>道徳的実践力(自己指導能力)の向上 (教務・学年)</p>	<p>「心の居場所」がある学校づくり (学年・生徒指導)</p> <p>道徳的実践力(自己指導能力)の向上 (教務・学年)</p>	<p>個人の良さを発揮できる機会や他者から認められる場が安定して実施できたことで「自分には良いところがある」80%「安心できる居場所がある」94%「先生に相談できる」84%とアンケートで肯定的な評価をした生徒は多かった。行事や学年での取組の中で、日々の生徒への声かけなど自己肯定感を高める活動が概ねできたと考えられる。一方で「学校に来るのは楽しいと思わない」15%など、学校に対して否定的な印象を持つ生徒の存在が課題である。</p> <p>「あいさつ」「返事」「時間」「掃除」に関するアンケートに肯定的な評価をした生徒の割合は93%であった。目標値より3ポイント下回っているが、コロナ禍の中で、挨拶や返事など、他人とのコミュニケーションの機会が減っていることが要因の一つと考えられる。</p>	<p>生徒の悩みや思いに教員が寄り添うことで、学校が「心の居場所」となることができると考えられる。そのため生徒指導部会の定例化に伴う情報共有の徹底と、全教職員で関わる体制作りを行うとともに、担任と副担任のそれぞれで面談する機会を安定して設けることで、学校として生徒に寄り添っていく形を創出していきたいと考える。</p> <p>「あいさつ」「返事」について、今後は大きな声での挨拶・返事をするように指導していく。「時間」については、3分前入室、1分前着席を徹底していく。</p>
*	<p>体力・運動能力の向上 (体育科)</p> <p>基本的な生活習慣の定着 (学年・生徒指導)</p>	<p>体力・運動能力の向上 (体育科)</p> <p>基本的な生活習慣の定着 (学年・生徒指導)</p>	<p>前年度よりも記録が伸びた生徒は、50m走では、男子90%、女子77%、20mシャトルランでは、男子74%、女子52%であった。コロナ禍における運動機会の減少から、感染対策を講じながら少しずつ以前の運動状況に戻っているが、持久力の向上率は例年よりも鈍化している。</p> <p>「三点固定ができています」と肯定的な回答をした生徒は、7年生が69%、8年生が80%、9年生が64%であった。多くの生徒が生活習慣の安定が欠けていることが分かる。</p> <p>遅刻については、延べ回数で7年生109回、8年生277回、9年生194回であった。昨年度より減少はしているが、登校時間の終了間際に駆け込む生徒が多い。生徒自身に余裕を持って起床する習慣をつかさせるとともに、保護者の協力を仰ぐ必要がある。同時に生徒のメディアコントロールに課題があり、生活習慣の乱れにつながっている。</p>	<p>体育大会やクラスマッチの実施など、運動に親しみ、目標をもって運動できる機会を増やす。また、体育授業や部活動において、走力を高める運動を継続的に取り組む。</p> <p>スタンダードやアンケートをもとに起床時間、就寝時間、学習開始時間、メディア終了時間を把握するとともに、気になる生徒については生徒への指導と家庭への連携を図っていく。</p> <p>複数回遅刻をした場合は家庭と連携を図り、保護者とともに取り組んでいく。メディアコントロールについては保護者理解を進め、家庭でのルール作りや監視に取り組んでいきたい。そのため、保護者を対象とした説明会など、「知る」機会の提供を行う。</p>
業務改善	<p>生徒と向き合う時間の確保</p> <p>時間外勤務の縮減</p>	<p>生徒と向き合う時間の確保</p> <p>時間外勤務の縮減</p>	<p>生徒と向き合う時間の確保ができていないと回答した教員の割合は78%で、昨年度の同時期のアンケートの数値と比較すると2ポイント上昇した。</p> <p>時間外勤務が月45時間以下の教職員の割合は56%であり、昨年度同時期よりも13%向上している。しかし、45時間以上の教職員は固定化する傾向にある。</p>	<p>ICTの有効活用とともに、生徒指導員、学校教育指導補助員、スクールサポートスタッフ等との連携を密にし、業務の分散と簡略化を図る。</p> <p>教職員の業務の進捗状況を確認し、部活動や分掌業務分担の見直しを行う。定時退校日の呼びかけを継続していく。</p>